二葉亭四迷『浮雲』におけるダ体の概念

安　達　太　郎

キーワード：二葉亭四迷、『浮雲』、ダ体、スタイル、言文一致

1．はじめに

近代を迎えて間もない明治初期の日本語にあって克服されなくてはならなかったのは、「言」と「文」の乖離、つまり話しことばと書きことばがかけ離れているという現実だった。「言」と「文」が乖離している状況では特別な教育を集中的に受けることで書きことばを獲得する必要があるが、それができるのは一握りの人々に限定されざるを得ない。「言」にもとづいた「文」を創出して、誕生したばかりの「国民」がさまざまな意図を書き表すことができるようになることは時代の要請であったと言える。司馬遼太郎(1976)はこのような書きことばを「たれもが参加できる文章日本語」と呼んだ。

こうした時代に言文一致を掲げて登場した二葉亭四迷(1864-1909)が、近代的な文章日本語の形成に大きく寄与したことに疑いの余地はない。しかしながら、二葉亭がどのような日本語を創出したのかということについては、今なお十分に理解できているとは言えないように思う。例えば、小説文体として二葉亭がダ体、山田美妙がデスマス体、尾崎紅葉がデアル体を採用したとされるが、『浮雲』において「だ」語尾を持つ文がごくわずかしか用いられていないという事実を前にして、私たちはとまどわざるを得ない。

本論文では、『浮雲』において二葉亭がどのような日本語を創出しようとしたのかを理解することを目的として、『浮雲』というテキストにおけるダ体概念の再検討を行いたい。以下の構成は次のとおりである。2節ではスタイルという文法カテゴリーについて概観し、言文一致期におけるダ体の状況について確認する。3節ではスタイルという観点から『浮雲』のテキストについて問題提起を行う。4節では考察の基礎となるデータについて概観し、5節でテキストの検討をとおして名詞を中心とした語類の終止の語形について考えていく。

2．文法カテゴリーとしてのスタイル

二葉亭四迷が生み出した『浮雲』は不思議なテキストである。それを理解するための前提として、現代日本語における文法カテゴリーとしてのスタイルについて踏まえておくことにした

い。

スタイルは、相手(聞き手、読み手)に対するていねいさに関わる文法カテゴリーである。相手との距離感の調整に関わる文法カテゴリーと言ってもよい。話しことばであれば、聞き手との距離を近づける非ていねい体と距離を遠ざけるていねい体の対立からなる。

書きことばには話しことばとしてはあまり使われない「である」語尾が体系に加わることになる。代表語例を用いて書きことばにおけるスタイルの体系を示しておく。なお、書きことばとしてはていねい体の代わりに敬体、非ていねい体の代わりに常体という用語を使うことにする。

表1　日本語の書きことばのスタイル

		動詞	名詞	ナ形容詞	イ形容詞
常体	ダ体	書く	学生だ	静かだ	広い
	デアル体		学生である	静かである	
敬体	デスマス体	書きます	学生です	静かです	広いです

書きことばの常体はダ体とデアル体に分化するが、その違いは名詞とナ形容詞(以下、両者を合わせて名詞類と呼ぶ)だけに見られることに注意しておきたい。つまり、文法カテゴリーとしてのスタイルは述語の品詞によって分化が異なるという性質を持っており、ダ体とデアル体の分化について考えるためには名詞類に注目する必要があるということになる。逆に言うと、述語として名詞類を用いるときは、動詞や形容詞に比べてより複雑なスタイル上の配慮を日本語は行っているということを意味している。

スタイルが他の文法カテゴリーと違うのは、文レベルの文法カテゴリーであるのと同時に、テキストレベルにも関わるという点である。ある文が「だ」語尾をとるか、「である」語尾をとるか、あるいは「です」語尾をとるかということと同時に、テキスト全体をとおして、「だ」語尾あるいは「である」語尾を一貫して用いるのか、どちらかを基調としながらも他の語尾を混在させるのかといったことによって、テキストとしてのスタイルが決まる。

本論文では、書きことばにおける「だ」「である」「です」といった述語化形式(繋辞 copula)は、単にスタイルの違いによって使い分けられているわけではないと考えている。二葉亭と同時期にダ体を試みた山田美妙「武蔵野」(1887(明治20)年)と嵯峨の屋おむろ「初恋」(1889(明治22)年)が「だ」語尾を用いることの困難を明らかにしている(詳しくは安達太郎(2017)を参照のこと)。

山田美妙は「武蔵野」の中で言文一致による斬新な日本語表現を試みたが、作品自体はその新しさが評判を得たものの、美妙が用いた「だ」語尾に対しては、俗であり下品であるといった批評家からのきびしい批判に晒されることとなった。その結果、美妙はダ体を断念し、敬体(デスマス体)による小説に取り組むことになったのである。

「武蔵野」発表当時の批評家だけでなく、現代の私たちの目にも「武蔵野」の「だ」語尾は

奇異に感じられる。次の２例を参照されたい。

(1)　頃は秋。其処此処我儘に生えて居た木も既に緑の上衣を剥がれて、寒いか、風に慄へて居ると、旅帰の椋鳥は慰顔にも澄まし切ツて囀ツて居る。処へ大層急足で西の方から歩行て来るのはわづか二人の武者で、いづれも旅行の体だ。

(2)　言切つて母は返辞を待兒に忍藻の顔を見詰めるので忍藻も仕方なささうに、挨拶したが、それも僅かに一言だ。

筆者はこれらの「だ」語尾に「俗」とか「下品」といったニュアンスを感じ取ることはできないが、たしかに何とも言えない落ち着きの悪さは感じる。

この落ち着きの悪さを理解する手がかりを与えてくれるのが嵯峨の屋おむろの「初恋」である。二葉亭の友人でもあった嵯峨の屋の「初恋」は、少年時代の遠縁の娘との淡い恋心を老境にさしかかった語り手が回想するという作品である。嵯峨の屋はここで次のような「だ」語尾を用いている。

(3)　我々の近くのに気が着たか、件の男は此方をふり向いた、見覚えの貌だ、よく見れば山奉行の森といふ人で、残の二人は山方中間であッた。

(4)　遙に向ふを見渡すと、森や林が幾里ともなく続いて居るが、霞に籠ッて限りもなく遠さうだ、近い所の木は梢を水鏡に写して、倒に水底から生て居るが、其水の青さ、如何にも深さうだ、薪を積上げた船や筏が湖上を彼地此地と往来して居るが、如何様林から切出したのを、諸方に運送する者らしい。

当時の批評家は「武蔵野」の「だ」語尾に対する嫌悪感を強く表明し、「だ」語尾が下流の言語であることを理由として攻撃した。しかし、同じく「だ」語尾を用いた嵯峨の屋の「初恋」では同様の批判が出なかったばかりでなく、現代の感覚でも「初恋」の「だ」語尾にはそれほどの違和感はない。「武蔵野」の「だ」語尾に対する違和感は、「だ」そのもの性質によるものではなく、当該文脈の中での適切性によるものであると理解するべきだと考える。「だ」語尾は、一人称視点をとる回想的小説には合っているが、中立的な視点をとる三人称小説(「武蔵野」)にはふさわしくないのである。

『浮雲』の名詞類の分析にあたっても、「だ」や「で」といった名詞類の語尾だけに注目して検討していくのでは不十分である。名詞類がおかれる文脈からうかがわれる語り手の視点や語り口といったテキストの特徴に留意して分析を行っていくことを方針とする。

3．スタイルの観点から見た『浮雲』

東京外国語学校でロシア語を学び、ロシア文学に親しんだ二葉亭四迷が、坪内逍遙の推薦のもとに、世に送り出したのが『浮雲』である。第一篇は1887(明治20)年に、第二篇は1888(明治21)年に金港堂から出版された。第三篇は1889(明治22)年の７月から８月にかけて『都の花』に連載された。

『浮雲』各篇が3年にわたって刊行されたということは重要である。『浮雲』は、日本語の実験場という趣があり、各篇は大きく性質を異にするテキストからなっている。『浮雲』の文章の分析にあたっては、『浮雲』を均質なテキストと見る態度をとらず、各篇それぞれのテキストの性質に注目しながら行うことが必要であろう。

ここでスタイルという観点から『浮雲』について考えてみよう。二葉亭四迷は言文一致を試みるにあたって『浮雲』においてダ体を採用したというのが定説である。しかし、先行研究で指摘されているように、『浮雲』の作中には「だ」語尾があまり使われていないのである。このようなテキストをダ体として位置づけることはけっしてあたりまえのことではない。

しかし、『浮雲』がダ体とされるのには根拠がある。『文章世界』誌の記者によってまとめられた「余が言文一致の由来」(1906(明治39)年)という談話記事の中で、二葉亭自身が二十年近く前の『浮雲』執筆時を回顧して、ダ体(二葉亭は「だ」主義とか「だ」調という呼び方をしている)を採用したと語っているのである。次の引用は、二葉亭が小説文体について坪内逍遙に教えを請うたところ、「円朝の落語(はなし)通りに書いて見たら何うか」という助言を受けたという有名な逸話に続く部分である(以下の引用における下線は私に付した)。

> それは兎に角、円朝ばりであるから無論言文一致体にはなつてゐるが、茲(こゝ)にまだ問題がある。それは「私(わたくし)が……で厶(ござ)います」調にしたものか、それとも、「俺はいやだ」調で行つたものかと云ふことだ。坪内先生は敬語のない方がいゝと云ふお説である。自分は不服の点もないではなかつたが、直して貰はうとまで思つてゐる先生の仰有(おつしや)る事ではあり、先づ兎も角もと、敬語なしでやつて見た。これが自分の言文一致を書き初めた抑(そもそ)もである。
>
> 暫らくすると、山田美妙君の言文一致が発表された。見ると、「私(わたくし)は……です」の敬語調だ。自分とは別派である。即ち自分は「だ」主義、山田君は「です」主義だ。後で聞いて見ると、山田君は始め敬語なしの「だ」調を試みて見たが、どうも旨く行かぬと云ふので、「です」調に定(き)めたといふ。自分は始め、「です」調でやらうかと思つて、遂に「だ」調にした。即ち行き方が全然反対であつたのだ。 (二葉亭四迷(1906)「余が言文一致の由来」)

この談話の中で二葉亭自らがダ体を採用したと明言しているにも関わらず、『浮雲』には「だ」語尾がきわめて少ないという事実は、研究者たちを困惑させるものであったと思われる。これを理解するために、二葉亭がダ体(「だ」調)という名称で言い表そうとしたのは丁寧語をとらない常体のことであるという見解が提示されている。常体におけるデアル体とダ体の対立においてダ体をとらえるのではなく、常体と敬体の対立における常体をダ体と呼んだのだと考えるわけである。

言文一致に関する浩瀚な研究で知られる山本正秀(1965)の見解を見てみよう。山本は、ロシアの文学と文学理論に学んだ二葉亭の写実主義やリアリズム精神を高く評価した上で、『浮雲』の文章について次のように述べている。

> (略)、そして逍遙のこの助言は大いにほめられてよい。それは、敬体の不採用によって日本俗語の冗長性を脱し、「だ」調採用によって簡潔で力強い語調上の利を得たばかりでな

く、近代小説に重要な写実の叙法上から見ても、主観的また私交的な「でございます」「であります」「です」諸調の敬体よりも、比較的に客観的な「だ」調の非敬体の方が適しているからである。なお当時「だ」調とか「だ」止めとか呼ばれたものは、「でございます」「であります」「ます」「です」等の敬体や半敬体(丁寧体)でない、つまり文末を「だ」「た」「ゐる」等で止めた平話体・非敬体の言文一致文章を指したようである。

(山本正秀(1965：496))

『浮雲』の文章に関する日本語学的研究である尾崎知光(1967)、遠藤好英(2004)の見解も、山本(1965)と同様のものと考えることができる。

二葉亭が『浮雲』で採用した「ダ体」を、常体の中でのデアル体と対立するものとしてとらえるのではなく、敬体と対立する常体としてとらえるという理解は妥当性が高いと考えられる。しかし、二葉亭が開発した言文一致による小説文体が常体だったとしても、それだけでは二葉亭の創意がどこにあるのかがわからない。この理解は結論というよりも出発点なのではないかと思われる。

以下の分析においては、ダ終止、デ終止や名詞終止といった名詞類の終止法だけでなく、『浮雲』というテキストで中心的に用いられている動詞類述語の終止法にも目配りをしながら、二葉亭が模索していた小説文体について考えていきたい。

4．調査の概要と結果

4.1　調査の概要

本節では本論文において行った調査の概要について説明し、1)地の文と会話文、2)文末の品詞型、3)動詞類の終止法、4)名詞類の終止法、5)形容詞類の終止法について調査結果を報告する。

底本として用いたのは岩波書店版の『二葉亭四迷全集』第1巻(1964年)に収録されている『浮雲』である。最新の全集である筑摩書房版(1984年)を使わなかった理由は句読点にある。二葉亭は『浮雲』の第一篇、第二篇では句読点をあまり用いておらず、第三篇では現代と近い感覚で用いているものの、句読点に加えて白ゴマ点(、)も用いている。筑摩書房版はこれを忠実に再現しているのに対して、岩波書店版は先行する朝日新聞社版全集(1910年)を踏まえて句読点を補っているのである。先行研究の調査において、例えば、ダ終止の数に多少の違いが生じているのは文の切れ目の判断が研究者によって異なることがあるからである。この論文では句読点を補って文の切れ目を明示している岩波書店版を用いることで、これに関する筆者の判断ができるだけ前面に出ないようにした。ただし、白ゴマ点に関しては、筆者の判断で時に読点、時に句点として処理した。

4.2　地の文と会話文の比率

まず、表２によって『浮雲』各篇における地の文と会話文の比率について見ておこう。

表２　地の文と会話文

	第一篇		第二篇		第三篇	
地の文	275例	53.6％	451例	53.9％	446例	78.2％
会話文	238例	46.4％	385例	46.0％	124例	21.8％
その他			１例	0.1％		
合計	513例	100.0％	837例	99.9％	570例	100.0％

第一篇と第二篇では同じ傾向を示している。地の文と会話文の比率は拮抗しており、やや地の文の方が多いというところである。ところが、第三篇は圧倒的に地の文が多く、会話文が少ない。これは第三篇では主人公内海文三が自分の部屋に引きこもってしまうため、主要登場人物（お勢、お政、本田昇）との交流が絶えてしまうからである。地の文の中には、文三の視点をとった心理描写や、語り手による出来事の描写が多くを占めるようになる。

4.3　品詞別の比率

次に地の文の文末について、品詞別の比率を見ていくことにしよう。調査にあたっては、スタイルをめぐる分析を行うことを考慮して、ナ形容詞（形容動詞）を名詞と合わせて名詞類とし、助動詞類もその性質に応じて動詞類、名詞類、形容詞類に振り分けることとした。例えば、「かもしれない」は動詞の否定形からなるので動詞類とし、「ようだ」「ことだ」「ばかりだ」などは名詞類、「らしい」「相違ない」は形容詞類とした。また、「だろう」「であろう」は名詞類とし、「苦労になろう」や「悪かったろう」のようなウ形はそれぞれ動詞類、形容詞類に入れた。文末が省略されている場合や助動詞「まい」は「その他」に分類した。

『浮雲』各篇の品詞別の比率について示す。結果は表３のとおりである。

表３　品 詞 別

	第一篇		第二篇		第三篇	
動詞類	188例	68.4％	327例	72.5％	316例	70.9％
名詞類	63例	22.9％	68例	15.1％	92例	20.6％
形容詞類	18例	6.5％	45例	10.0％	23例	5.2％
その他	６例	2.2％	11例	2.4％	15例	3.4％
合計	275例	100.0％	451例	100.0％	446例	100.0％

表３からは、各篇の品詞別の比率がおおよそ安定していることがうかがえる。もっとも多いのが動詞類で約７割、次いで名詞類が約２割、形容詞類は１割弱にとどまるというのが『浮雲』各篇の傾向である。その中で、第二篇では名詞類の比率がやや少なくなっていることがわ

かる。

4.4　動詞類の終止法

ここからは、品詞ごとに、どのような形で終止するかをまとめていくことにする。ここでは数量的な偏りから特徴を指摘しておきたい。

まず語例がもっとも多い動詞類である。表４を参照されたい。

表４　動詞類の終止法

	第一篇		第二篇		第三篇	
基本/ル形	147例	78.2%	86例	26.3%	132例	41.8%
基本/タ形	26例	13.8%	185例	56.6%	116例	36.7%
基本/ケリ形			1 例	0.3%		
否定/ナイ形	3 例	1.6%	23例	7.0%	33例	10.4%
否定/ズ形	1 例	0.5%	2 例	0.6%	2 例	0.6%
否定/ヌ形	7 例	3.7%	19例	5.8%	5 例	1.6%
否定/ン形					14例	4.4%
否定/ナカッタ形			8 例	2.4%	4 例	1.3%
モーダル/意志勧誘形	4 例	2.1%			1 例	0.3%
モーダル/命令形			1 例	0.3%	1 例	0.3%
モーダル/ウ形			2 例	0.6%	5 例	1.6%
疑問/カ					1 例	0.3%
疑問/ウカ					2 例	0.6%
合計	188例	100.0%	327例	100.0%	316例	100.0%

動詞類の終止法について注目したい点はふたつある。ひとつはテンスに関すること、もうひとつはモーダル、とくに意志勧誘形の使用に関することである。

小説言語におけるテンス語形は出来事の叙述の進行に関わるものであり、現代小説であれば、タ形を基調としながらル形が交えられるのが一般的である。しかし、表４からはル形とタ形の選択について『浮雲』の各篇にいちじるしい違いがあることがわかる。第一篇ではル形が圧倒的に支配的であり、実に78.2%(147例)を占めている。タ形はわずかに13.8%(26例)に過ぎない。ところが、第二篇では状況は一変する。中心的に使われるのは56.6%(185例)のタ形であり、ル形は26.3%(86例)にとどまっている。第三篇ではル形とタ形の比率は拮抗する。ル形がわずかに多く41.8%(132例)、タ形は36.7%(116例)となる。

次に地の文における意志勧誘形についてである。使用例はわずか５例であるが、非常に特徴的であり、また印象深い。第一篇の冒頭近くで内海文三が免職の宣言を受けたことによる鬱屈を抱えて家に戻って来た場面を例としてあげておく。

(5)　「フ、、ン、馬鹿を言給ふな。」

ト高い男は顔に似気(にげ)なく微笑みを含み、さて失敬の挨拶も手軽るく、別れて独り小川町(おがはまち)の方へ参る。顔の微笑が一かは／＼消え往くにつれ、足取も次第／＼に緩かになつて、終(つひ)には虫の這ふ様になり、悄然(しょんぼり)と頭(かうべ)をうな垂れて二三町程も参った頃、不図立止りて四辺(あたり)を回顧(みまは)し、駭然(がいぜん)として二足三足立戻ッて、トある横町へ曲り込んで、角から三軒目の格子戸作りの二階家へ這入(はい)る。一所(いつしよ)に這入ッて見よう。(第一回)

本論文では、名詞類を中心としたスタイルを分析する上で、そのテキストがどのような語り方を採用しているのかが深く関わってくると考えている。(5)の語り手は、現代小説でなじみ深い、中立的な語り手ではなく、あたかも特定の人格を持った存在として読者を誘導しようとしている。第一篇にはこのような人格を持った語り手による語りがときおり挿入されるが、第二篇以降では顔をひそめてしまう。なお、第三篇に1例だけ現れる意志勧誘形は文三の心内の決意を語るものであり、(5)とはまったく性質が異なる。

4.5　名詞類の終止法

ここでは本論文の中心的な課題である名詞類の終止法を取り上げたい。調査結果は表5のとおりである。

表5　名詞類述語の終止法

	第一篇		第二篇		第三篇	
基本/ダ	2例	3.2%	2例	2.9%		
基本/デアル					3例	3.3%
基本/デアッタ					5例	5.4%
基本/デ	9例	14.3%	31例	45.6%	15例	16.3%
基本/名詞	46例	73.0%	24例	35.3%	49例	53.3%
否定/デナイ	4例	6.3%	5例	7.4%	4例	4.3%
否定/デナカッタ			1例	1.5%		
モーダル/ダロウ						
モーダル/デアラウ	1例	1.6%	1例	1.5%	4例	4.3%
疑問/カ					6例	6.5%
疑問/ゼロ					1例	1.1%
疑問/ダロウカ			1例	1.5%		
疑問/デアラウカ			3例	4.4%	2例	2.2%
感歎/名詞					1例	1.1%
感歎/ナ	1例	1.6%			2例	2.2%
合計	63例	100.0%	68例	100.0%	92例	100.0%

名詞類の終止法について注目したいのは、ダ終止、デ終止、そして名詞終止である。さらに

第三篇にはデアル終止、デアッタ終止が現れていることにも注意しておきたい。

ダ体小説の嚆矢という評価は定まっているものの『浮雲』全篇をとおしてダ終止はわずかに４例しか用いられていない。その４例は第一篇に２例、第二篇に２例あるのみであり、第三篇にはダ終止は用いられていないのである。二葉亭が『浮雲』においてダ体を採用したという通説を素直に信じているととまどうことになってしまうと述べたとおりである。

第一篇における中心的な名詞類の語尾は、語尾に述語化形式をとらない名詞終止であり、73.0％(46例)という圧倒的な数値を示している。次いでデ終止14.3％(９例)、そしてダ終止が3.2％(２例)となる。第二篇では状況は大きく変わり、名詞終止が大きく数値を減らし35.3％(24例)、代わってデ終止の比率が45.6％(31例)と逆転する。ダ終止は2.9％(２例)である。つまり、第二篇はデ終止と名詞終止を中心としたスタイルをとると考えることができる。第三篇では再び名詞終止の使用率が53.3％(49例)と高くなり、デ終止が16.3％(15例)と抑制的になる。ダ終止はこの篇では用いられておらず、入れ替わるように、少数ではあるがデアル終止とデアッタ終止がそれぞれ3.3％(３例)と5.4％(５例)用いられている。

4.6　形容詞類の終止法

最後に形容詞類についての調査結果を表６に示す。形容詞類は用例も少なく、本論文の分析でも大きな役割を果たすものではないので、簡単に結果だけを示しておく。

表６　形容詞類述語の終止法

	第一篇		第二篇		第三篇	
基本/イ形	10例	55.6％	37例	82.2％	７例	30.4％
基本/シ形	８例	44.4％	１例	2.2％	４例	17.4％
基本/タ形			３例	6.7％		
否定/ナイ形			２例	4.4％	９例	39.1％
否定/ナカッタ形					２例	8.7％
否定/ヌ形			２例	4.4％		
モーダル/ウ形					１例	4.3％
合計	18例	100.0％	45例	100.0％	23例	100.0％

表６からわかるのは、『浮雲』においては、現代語的な語尾(イ形)と古典語的な語尾(シ形)がせめぎあっているということである。第一篇では拮抗していた両語尾のバランスが、第二篇で現代語的なイ形の方に触れたが、第三篇ではまた拮抗した状態に戻っている。しかしあるいは、両語尾の揺れ以上に、第二篇の形容詞類の使用率が他の篇よりも多少高くなっていることの方が意味を持つのかもしれない。

5．『浮雲』各篇の分析

5.1　第 一 篇

前節で数量的な観点から『浮雲』のテキストに見られる特徴を概観した。そこでは『浮雲』というテキストが一貫した性質を持つものではなく、各篇ごとに二葉亭の試行錯誤が認められることが明らかになった。二葉亭自身も「作家苦心談」(1897(明治30)年)、「余が半生の懺悔」(1908(明治41)年)といった談話記事で、第一篇は式亭三馬や饗庭篁村らの影響を受け、第二篇、第三篇はガンチャロフやドストエフスキーを意識していたと述べている。以下では『浮雲』の各篇について、文章上の特徴を踏まえながら、名詞類の終止法が持つ意味について考察していきたい。

第一篇は役人の退庁風景の描写から始まる。苦学の末下級役人の職を得ていた内海文三は官制改革のあおりをうけて免職となる。文三は遠縁にあたる園田家に下宿しており、叔母お政は娘のお勢を文三と結婚させるつもりになっていたが、文三の免職を受けて考えを翻す。文三の同僚で、処世術が巧みな本田昇が内海家に近づいてくる。第一篇は昇がお政とお勢を菊見に誘うところで終わる。

第一篇の文章の特徴を見ていこう。「千早振る神無月も最早跡二日の余波となッた廿八日の午後三時頃に、神田見附の内より、塗渡る蟻、散る蜘蛛の子とうよ／＼ぞよ／＼沸出でゝ来るのは、孰れも顋を気にし給ふ方々。」で始まる冒頭は言文一致の新文体とは思えないもので現代の読者を驚かせるが、二葉亭が『浮雲』を構想した段階での新文体のイメージをもっとも忠実に反映するのが第一篇であるのかもしれないと考えると興味深い。

第一篇のテキストは、人格を持つ語り手による語りの再現といった趣がある。小説文体というよりも、講談や落語を思わせるものである。前に(5)として「一所に這入ッて見よう」と読者を誘いかける語り手を見たが、他にも次のような例文で、聞き手を誘導する語り手の姿を目にすることができる。

(6)　茲にチト艶いた一條のお噺があるが、<u>之を記す前に、チヨツピリ孫兵衛の長女お勢の小伝を伺ひませう</u>。(第二回)

(7)　「若しさうなれば最う叔母の許を受けたも同前……チヨツ寧そ打附けに……」ト思ッた事は屡々有ッたが、「イヤ／＼滅多な事を言出して取着かれぬ返答をされては」ト思ひ直してヂット意馬の絆を引緊め、藻に住む虫の我から苦んでゐた……<u>これからが肝腎要、回を改めて伺ひませう</u>。(第二回)

昇と園田家の関係が次第に深まってきたことをあやしむ次例では、語り手はお政や昇といった当事者に聞かれないよう気づかいながら読者と内緒話を始める。語り手と読者の間に秘密の共有という共犯関係を取り結ぶかのようである。

(9)　勿論お政には殊の外気に入ッてチヤホヤされる、気に入り過ぎはしないかと岡焼を

する者も有るが、正可四十面をさげて……お勢には……シッ跫音がする、昇ではないか……当ッた。（第六回）

人格を持つ語り手が第一篇中に常に顔を出しているわけではない。しかし、読者は、数カ所見られるこのような手法によって、語り手の存在を意識せざるを得ない状況におかれるのである。

4.4で見た動詞類の終止法の偏りは、人格を持つ語り手による語りを暗に特徴づけるものだと思われる。第一篇では動詞類はル形が78.2％、タ形が13.8％の使用率であり、圧倒的にル形が叙述を中心的に担っている。ル形を連ねて出来事を展開させていく手法は、講談や落語のような話芸の語り口を彷彿とさせるものである。

次の例を見てみたい。6例のル形が一連の出来事を時間の流れの中でテンポよく展開している。

（10）　翌朝に至りて両人の者は始めて顔を合はせる。文三はお勢よりは気まりを悪がッて口数をきかず。此夏の事務の鞅掌さ、暑中休暇も取れぬので匆々に出勤する。十二時頃に帰宅する。下坐舗で昼食を済して二階の居間へ戻り、「ア、熱かッた」ト風を納れている所へ、梯子バタ／＼でお勢が上ッて参り、二ツ三ツ英語の不審を質問する。質問して仕舞へば最早用の無い筈だが、何かモヂ／＼して交野の鶉を極めてゐる。（第三回）

一方、こうした特徴を持つテキストの中でタ形は小さな場面展開といったときに挿入されるに過ぎない。次例では「膳に向ッた」と「さて食事も済む」の間に多少の時間の経過を感じることができる。

（11）　……淡雪の日の眼に逢ッて解けるが如く、胸の鬱結も解けてムシヤクシヤも消え／＼になり、今までの我を怪しむばかり、心の変動、心底に沈んでゐた嬉しみ有難みが思ひ懸けなくもニッコリ顔へ浮み出し懸ッた……が、グッと飲込んで仕舞ひ、心では笑ひながら顔ではフテ、膳に向ッた。さて食事も済む。二階へ立戻ッて文三が再び取旁付に懸らうとして見たが、何となく拍子抜けがして以前のやうな気力が出ない。（第五回）

名詞類に目を向けてみよう。人格を持った語り手が演者としてあたかも読者の眼前で口演することを再現するのが第一篇のテキストの意図だとするならば、二葉亭は名詞類にもそれにふさわしい終止法を選んでいると考えることができるだろう。そして、それは第一篇の名詞類の終止法の73.0％を占める名詞終止なのではないかと思われる。

（12）　其半面を文三が竊むが如く眺め遣れば、眼鼻口の美しさは常に異ッたこともないが、月の光を受けて些し蒼味を帯んだ瓜実顔に、ほつれ掛ッたいたづら髪、二筋三筋扇頭の微風に戦いで頬の辺を往来する所は、慄然とするほど凄味が有る。暫らく文三がシケ／＼と眺めているト、頓て凄味のある半面が次第／＼に此方へ捻れて……パッチリとした涼しい眼がジロリと動き出して……見とれてゐた眼とピッタリ出逢ふ。螺の

壺々口に莞然と含んだ微笑を、細根大根に白魚を五本並べたやうな手が持てゐた団扇で隠蔽して、耻かしさうなしこなし。文三の眼は俄に光り出す。（第三回）

動詞類のル形が続いてテキストの基調を作る中に現れる名詞類の名詞終止は文脈によくなじむように感じる。「だ」や「で」のような語尾をとらない名詞終止は、文の切れ目を感じさせない点で、動詞ル形とのなじみがよい。

第一篇にはダ終止が２例存在している。どんな文脈において用いられているのか確認してみよう。

（13）　是より降つては、背皺よると枕詞の付く「スコッチ」の背広にゴリ／＼するほどの牛の毛皮靴、そこで踵にお飾を絶さぬ所から泥に尾を曳く亀甲洋袴、いづれも釣しんぼうの苦患を今に脱せぬ貌付、デモ持主は得意なもので、髭あり服あり我また奚をか竟めんと済した顔色で、火をくれた木頭と反身ッてお帰り遊ばす、イヤお羨しいことだ。（第一回）

（14）　此課長殿といふお方は、（中略）、言はば自由主義の圧制家といふ御方だから、哀れや属官の人々は御機嫌の取様に迷いてウロ／＼する中に、独り昇は迷かぬ。まづ課長殿の身態声音はおろか、咳払ひの様子から嚔の仕方まで真似たものだ。ヤ其また真似の巧な事といふものは、宛も其人が其処に居て云為するが如くでそつくり其儘、唯相違と言ッては、課長殿は誰の前でもアハ、、とお笑ひ遊ばすが、昇は人に依ッてエヘ、笑ひをする而已。（第六回）

(13)は第一回冒頭近くの例で、下級官僚の冴えない様子を揶揄するなかで、語り手が皮肉な感想を口にするものである。人格を持つ語り手が前に出てきた例のひとつと言える。また、(14)は課長に対する昇の態度を具体的なエピソードで語っているもので、(13)ほどではないにしても、読者には語り手の存在が意識化されやすい。どちらの例も、現代小説の地の文におけるダ終止とはかなり異なる性質を持つように感じられるが、二葉亭の意図が演ずるような語りの再現にあったとすると、このようなダ終止は会話文に近い性質を持つ地の文という意図に沿ったものとして理解することができる。

5.2　第 二 篇

第二篇の筋立ては以下のとおりである。お政とお勢は昇とともに団子坂に菊見に出かける。昇は文三にも声をかけるが文三は頑なに拒否する。人混みの中で出会った課長に昇が平身低頭しているあいだ、お勢は課長夫人の妹をじっと見つめていた。一方、文三は菊見に出かけたお勢の気持ちを理解できず、悶々としていた。数日後、文三は痩せ我慢は大抵にしろという昇にかけられた言葉を恥辱と受け止めるが、お政だけでなくお勢までもが昇の肩を持つようになる。

さて、第二篇のテキストを検討していこう。第一篇では、連続するル形によって出来事を進行させるという手法によって話芸を彷彿とさせるテキストを作り出していたが、第二篇ではテキストの性質は一変する。4.4における動詞類の終止法のデータ（表４）が示すように、第二篇で

はタ形が56.6％、ル形が26.3％という比率になり、タ形を中心として叙述が展開されているのである。この点で、第二篇のテキストは現代小説とかなり近い位置にある。第一篇の地の文が会話文に近い性質を持つ地の文であったのに対して、第二篇に至って地の文らしい地の文が現出したと言える。

第二篇には、中立的な視点をとるテキストと、文三に近い視点をとるテキストが存在している。例えば、「団子坂の観菊」と題された第七回は中立的な視点をとり、文三を家に残して観菊に出た昇、お勢、お政の様子を描写する。

(15)　暫らく立在での談話、間が隔離れてゐるに四辺が騒がしいので其言事は能く解らないが、なにしても昇は絶えず口角に微笑を含んで、折節に手真似をしながら、何事をか喋々と饒舌り立ててゐた。其内に、何か可笑しな事でも言ッたと見えて、紳士は俄然大口を開いて肩を揺ッてハッ／＼と笑ひ出し、丸髷の夫人も口頭に皺を寄せて笑ひ出し、束髪の令嬢もまた莞爾笑ひかけて、急に袖で口を掩ひ、額越に昇の貌を眺めて眼元で笑つた。身に余る面目に昇は得々として満面に笑ひを含ませ、紳士の笑ひ罷むを待ッてまた何か饒舌り出した。お勢母子の待ッてゐる事は全く忘れてゐるらしい。（第七回）

第八回は同じく「団子坂の観菊」と題されているが、園田家に残った文三がお勢の気持ちを推量するさまが、文三寄りの視点で描写される。次の例では文三の描写からすぐに心情に移行しており、ここでの語り手が文三そのものではないにしても、文三に近い位置を占めていることがわかる。

(16)　お勢母子の者の出向いた後、文三は漸く些し沈着て、徒然と机の辺に蹲踞ッた儘、腕を拱み顎を襟に埋めて懊悩たる物思ひに沈んだ。

どうも気に懸る、お勢の事が気に懸る。此様な区々たる事は苦に病むだけが損だ／＼と思ひながら、ツイどうも気に懸つてならぬ。（第八回）

第二篇における視点の違いは、名詞類の終止法に影響を与える。ダ終止は第三者的な視点のテキストよりも、登場人物視点のテキストになじむと考えられるからである。

第二篇の２例のダ終止を確認することにしよう。(17)は、自分に声をかけることもなく昇たちと菊観に出かけてしまったお勢の気持ちが理解できず、思い悩んでいる文三の心中を描くもの、(18)は、課長にとって部下である自分と昇とは同等のはずなのに、昇が課長との関係の近さを一方的にほのめかすことに納得できない文三の思考を追うものである。

(17)　スルト悪戯な妄想奴が野次馬に飛出して来て、アヽでは無いか斯うでは無いかと、真赤な贋物、宛事も無い邪推を掴ませる。贋物だ邪推だと必ずしも見透かしてゐるでもなく、又必ずしも居ないでもなく、ウカ／＼と文三が掴ませられる儘に掴んで、あへだり揉だり円めたり、また引延ばしたりして骨を折て事実にして仕舞ひ、今目前にその事が出来したやうに足掻きつ蹠きつ四苦八苦の苦楚を嘗め、然る後フト正眼を得てさて観ずれば、何の事だ、皆夢だ邪推だ取越苦労だ。（第八回）

(18)　それも宜しいが、課長は昇の為めに課長なら、文三の為めにもまた課長だ。それを昇は、恰も自家一個の課長のやうに、課長々々とひけらかして、頼みもせぬに「一臂の力を仮してやらう、橋渡しをしてやらう。」と云ッた。疑ひも無く昇は、課長の信用、三文不通の信用、主人が奴僕に措く如き信用を得てゐると云ッて、それを鼻に掛けてゐるに相違ない。(第九回)

どちら例も文三の心理描写の中にダ終止が用いられている。(17)はやや会話文的で、地の文におけるダ終止という範囲からは逸れているように感じられるのに対して、(18)は文三が思考を展開していく中で使われている。私たちが現代小説で見るような、観察し、思考する語り手が用いるダ終止と近い性質のダ終止であると考えてよいように思われる。

二葉亭はこの第二篇の一部で文三に近い視点をとって、彼の思考を展開するというテキストを作り出しているので、現代語と同様の性質を持つ(18)のようなダ終止をもっとたくさん用いても不思議ではなかった。しかし実際には、彼が第二篇で用いたダ終止は上の2例だけで、第二篇の名詞類の終止法としてはデ終止を重用することになる。第二篇の名詞類68例の45.6%がデ終止を採用しているのである。

第二篇のデ終止の中には、現代の感覚ではダ終止を用いることができそうに思える例もある。例えば、次の例である。

(19)　今日は十一月四日、打続いての快晴で空は余残なく晴渡ッてはゐるが、憂愁ある身の心は曇る。文三は朝から一室に垂籠めて、独り屈托の頭を疾ましてゐた。実は昨日朝飯の時、文三が叔母に対て、一昨日教師を番町に訪うて身の振方を依頼して来た趣を縷々咄し出したが、叔母は木然として情寡き者の如く「へー」ト余所事に聞流してゐてさらに取合はなかッた、それが未だに気になつて／＼ならないので。(第九回)

この例などは、「気になつて／＼ならないのだ」としても十分自然に感じられる。しかし、二葉亭はダ終止の使用には慎重なのである。

第二篇でデ終止が頻出するのは、第三者視点をとるテキストにおいて用いているからである。(20)は、団子坂の観菊に昇一行が到着した場面、(21)は文三が就職の斡旋を頼んでいる教師の説明である。両例とも、筆者にはデアル終止であれば十分自然に感じるが、ダ終止は落ち着きが悪く感じる。

(20)　轟然と飛ぶが如くに駆来ッた二台の腕車がピッタリと停止る。車を下りる男女三人の者は、お馴染の昇とお勢母子の者で。(第七回)

(21)　知己と云ふは石田某と云つて某学校の英語の教師で、文三とは師弟の間繋、曾て某省へ奉職したのも実は此男の周旋で。(第八回)

5.3　第 三 篇

第三篇は次のような筋立てである。文三は園田家を出て下宿することを考えるが、決心がつかない。お勢と話し合おうとするが拒否され、昼食時、お政の前でお勢に非難される。お政か

らはお勢に関わらないよう釘を刺される。昇とお勢の関係はいよいよ深まっていく。お政からはあからさまに邪魔者扱いされるようになった文三だが、留守中の叔父に代わってお勢を救えるのは自分しかいないと考えるようになっていた。もう一度お勢と話し合い、その言葉が受け入れられないなら園田家を出ようと決意する。

第三篇のテキストの顕著な特徴は、4.2で見たように、地の文の比率がきわだって高いことである(地の文78.2%、会話文21.8%)。これは、第三篇が語り手による語りと登場人物の言葉のやりとりからなるテキストだけでなく、文三の思惟を地の文で語るテキストや語り手が出来事の顛末をまとめて説明するようなテキストからなることによる。

第三篇のテキストを見てみよう。(22)は文三寄りの視点からの叙述、(23)は文三の思惟が展開されたものである。

(22)　お勢は気分の悪いを口実(いひだて)にして英語の稽古にも往かず、只一間に籠ッたぎり、音沙汰なし。昼飯(ひるはん)の時、顔を合はしたが、お勢は成り丈け文三の顔を見ぬやうにしてゐる。偶々(たま〳〵)眼を視合はせれば、すぐ首を据ゑて可笑しく澄ます。それが睨付(にらみつけ)られるより文三には辛い。雨は歇(や)まず、お勢は済まぬ顔、家内も湿り切ッて誰とて口を聞く者も無し。文三果は泣出したくなッた。(第十四回)

(23)　お政の浮薄、今更いふまでも無い。が、過(あや)まッた文三は、――実に今迄はお勢を見(み)謬(あや)まッてゐた。今となッて考へてみれば、お勢はさほど高潔でも無(ない)。移気(うつりぎ)、開豁(はで)、軽躁(かるはずみ)、それを高潔と取違へて、意味も無い外部の美、それを内部のと混同して、愧(はづ)かしいかな、文三はお勢に心を奪はれてゐた。(第十六回)

長文になるので例文として引用はしないが、お勢の変化とそのきっかけといったものを描く第十八回は、語り手がさまざまなエピソードのほとんどすべてを地の文で説明してしまう。登場人物の発言はもともと少ないが、その発言さえ会話文として独立させるのではなく、「「それでも睡いんだものを」と睡さうに分疏(いひわけ)をいふ。」のように地の文の中に取り込ませるのである。

このような第三篇のテキストのうち、特に文三の思惟の展開という性質を持つテキストではダ終止がもっと用いられてもいいように思われるが、実際には第三篇にはダ終止は現れない。名詞類の終止法として中心的に用いられるのは名詞終止である。

(24)　昇はさして変らず、尚ほ折節には戯言(ざれごと)など云ひ掛けてみるが、云ッても、もウお勢が相手にならず、勿論嬉しさうにも無く、たゞ「知りませんよ」と彼方(あちら)向くばかり。其故(それゆゑ)に、昇の戯(ざれ)ばみも鋒尖(ほこさき)が鈍ッて、大抵は、泣眠入(なきねい)るやうに、眠入ッて仕舞ふ。(第十八回)

(25)　「これが如何(どう)したの？」と平気な顔。
「如何もしないが、かうまづ俘虜(いけどり)にしておいてどッこい……」と振放さうとする手を握りしめる。(第十七回)

(26)　文三は酒に酔つた心地、如何(どう)仕ようといふ方角もなく、只茫然として殆ど無想の境(さかひ)に彷徨(さまよ)ッてゐるうちに、ふと心附いた。は今日お政が留守の事。またと無い上首尾。

思ひ切つて物を言つてみようか……と思ひ掛けてまたそれと思ひ定めぬうちに、下女部屋の障子がさらりと開く、その音を聞くと文三は我にも無く突と奥座敷へ入ッて仕舞つた ── 我にも無く、殆ど見られては不可とも思はずして。（第十九回）

(24)の「ばかり」や、(25)の「顔」で文を終えるタイプは第三篇で頻出する。第三篇の名詞終止は類例が多いのである。また、(26)のふたつの名詞終止は文三の心内を具体的に描くために用いられた名詞終止であると考えられる。

文三の思惟を特徴づけるように第三篇ではじめて用いられるようになったのが、デアル終止である。3例中の2例を示しておく。

(26)　お勢は実に軽躁で有る。けれども、軽躁で無い者が軽躁な事を為ようとて為得ぬが如く、軽躁な者は軽躁な事を為まいと思ッたとて、なか／＼為ずにはをられまい。（第十六回）

(27)　しかし、始終空想ばかりに耽ッてゐるでも無い、多く考へるうちには少しは稍々行はれさうな工夫を付ける、そのうちでまづ上策といふはこの頃の家内の動静を詳く叔父の耳へ入れて父親の口から篤とお勢に云い聞かせる、といふ一策で有る。さうしたら、或はお勢も眼が覚めようかと思はれる。（第十九回）

デアル体は、尾崎紅葉『多情多恨』(1896(明治29)年)で採用され、明治文学の標準的なスタイルとして確立していくことになるが、『浮雲』における採用はこれに先行している。しかし、文三がお勢や園田家について思惟をめぐらせる中だけでデアル終止が用いられるのは、あるいは文三の思惟と他のテキストタイプとを区別する、特別な形式だったのかもしれない。次例は現代の語感ではデアル終止がふさわしいと感じるところであろう。しかし、二葉亭は語り手の描写にデアル終止を使うことはなく、デ終止を活用するのである。

(28)　と、かうお勢を見棄たくない計りでなく、見棄ては寧ろ義理に背くと思へば、凝性の文三ゆゑ、もウ余事は思ッてゐられん、朝夕只此事ばかりに心を苦めて悶苦んでゐるから、宛も感覚が鈍くなつたやうで、お政が顔を皺めたとて、舌鼓を鳴らしたとて、其時ばかり少し居辛くおもふのみで、久しくそれに拘つてはゐられん。それでかう邪魔にされると知りつつ、園田の家を去る気にもなれず、いまに六畳の小座舗に気を詰らして始終壁に対ッて歎息のみしてゐるので。（第十九回）

6．おわりに

本論文では、二葉亭四迷の『浮雲』が多様な性質を持つテキストであるという認識に立ち、テキストの性質に検討を加えながら文法カテゴリーとしてのスタイルの弁別に寄与する名詞類の語尾について考察してきた。『浮雲』というテキストの性質を把握する困難さのために、十分な議論には及んでいないが、分析の方向性は示すことができたかと思う。

山田美妙のダ体と二葉亭のダ体は大きく性格を異にするものであった。美妙はダ終止を存分

に用いることでテキストの性質から逸脱した奇妙な文を生み出してしまった。一方、二葉亭はダ終止という語尾にこだわることなく、常体による小説文体の可能性をさまざまに追求する中で名詞類の語尾にも独自の工夫を織り込んでいったと言える。

二葉亭の「余が言文一致の由来」の後半に、式亭三馬の「所謂深川言葉という奴」を参考にしたとある。はじめて読んだとき以来、地の文に対する工夫について語っているはずなのになぜこのような言葉が出てくるのかよく分からないでいたのだが、「いかにも下品であるが、併しポエチカル」な「俗語の精神」に価値を置いていた二葉亭が想定していた言文一致の新文体は、あるいは、私たちが想像している以上に、話すように語る地の文をもつテキストだったのかもしれない。

引用本文について

『浮雲』の引用については、岩波書店版『二葉亭四迷全集第１巻』（1964年）に拠った。その他の本文の引用は筑摩書房版『二葉亭四迷全集』（1985年）を底本とした。なお、表記は新字旧仮名遣いとした。

参考文献

安達太郎（2017）「ダ体の意味―山田美妙のダ体作品を中心に―」『京都橘大学研究紀要』第43号、pp.1-13
安達太郎（2019）「「言」と「文」との距離―坪内逍遙の場合―」『京都橘大学研究紀要』第45号、pp.1-17
安藤宏（2015）『「私」をつくる　近代小説の試み』岩波書店
遠藤好英（2004）「ダ体の文章の系譜―『浮雲』の史的位置―」飛田良文編『国語論究第11集　言文一致運動』明治書院、pp.194-241
尾崎知光（1967）『近代文章の黎明』桜楓社
小森陽一（1988）『構造としての語り』新曜社
阪倉篤義（1957）「話すように書くということ　言文一致と逍遙・四迷」『国語国文』26-6、pp.403-409（『文章と表現』（角川書店、1975年）に再録）
阪倉篤義（1986）「「浮雲」の文章」『二葉亭四迷全集』月報５、筑摩書房
司馬遼太郎（1976）「文章日本語の成立と子規」『子規全集』第13巻月報、講談社（『歴史のなかの邂逅』７（中公文庫、2011年）に再録）
中村光夫（1993）『二葉亭四迷伝』講談社学芸文庫（原著は1958年刊行）
橋本陽介（2014）『物語における時間と話法の比較詩学　日本語と中国語からのナラトロジー』水声社
水野清（1958）「「浮雲」「あひびき」「めぐりあひ」―地の文における文末語について―」『言語生活』第80号、pp.62-64
山本正秀（1965）『近代文体発生の史的研究』岩波書店